武蔵野日曜集会

勝利と歓喜の福音
――ヨハネ伝第16章17～33節――

１９８５年２月３日（武蔵野）
小池辰雄

十字架の死　復活と聖霊降臨　無即無限無量　地獄行きを全部私が引き受けた　百行一死に如かず　その喜悦を奪う者なし　かの日には　あなたの中で　聖霊の力の凄さを自分で味わう　四位一体　弱さに徹しろ　使命感に生きろ　「人生の歌」

【ヨハネ16・17～33】

17爰に弟子たちのうち或者たがいに言う『「暫くせば我を見ず、また暫くして我を見るべし」と言い、かつ「父に往くによりて」と言い給えるは、如何なることぞ』18復言う『この暫くとは如何なることぞ、我等その言い給うところを知らず』19イエスその問わんと思えるを知りて言い給う『なんじら「暫くせば我を見ず、また暫くして我を見るべし」と我が言いしを尋ねあうか。20誠にまことに汝らに告ぐ、なんじらは泣き悲しみ、世は喜ばん。汝ら憂うべし、然れどその憂は喜悦とならん。21おんな産まんとする時は憂あり、その期いたるに因りてなり。子を産みてのちは苦痛をおぼえず、世に人の生まれたる喜悦によりてなり。22斯く汝らも今は憂あり、然れど我ふたたび汝らを見ん、その時なんじらの心喜ぶべし、その喜悦を奪う者なし。23かの日には汝ら何事をも我に問うまじ。誠にまことに汝らに告ぐ、汝等のすべて父に求むる物をば、我が名によりて賜うべし。24なんじら今までは何をも我が名によりて求めたることなし。求めよ、然らば受けん、而して汝らの喜悦みたさるべし。

25我これらの事を譬にて語りたりしが、また譬にて語らず、明白に父のことを汝らに告ぐるとき来らん。26その日には汝等わが名によりて求めん。我は汝らの為に父に請うと言わず、27父みずから汝らを愛し給えばなり。これ汝等われを愛し、また我の父より出で来りしことを信じたるに因る。28われ父より出でて世にきたれり、また世を離れて父に往くなり』29弟子たち言う『視よ、今は明白に語りて聊かも譬をいい給わず。30我ら今なんじの知り給わぬ所なく、また人の汝に問うを待ち給わぬことを知る。之によりて汝の神より出できたり給いしことを信ず』31イエス答え給う『なんじら今、信ずるか。

32 視よ、なんじら散されて各自おのが処にゆき、我をひとり遺すとき到らん、
否すでに到れり。然れど我ひとり居るにあらず、父われと偕に在すなり。
33 此等のことを汝らに語りたるは、汝ら我に在りて平安を得んが為なり。な
んじら世にありては患難あり、然れど雄々しかれ。我すでに世に勝てり』

●十字架の死

今日は、「勝利と歓喜の福音」と題しました。

17 爰に弟子たちのうち或者たがいに言う『「暫くせば我を見ず、また暫くして
我を見るべし」と言い、かつ「父に往くによりて」と言い給えるは、如何な
ることぞ』18 復言う『この暫くとは如何なることぞ、我等その言い給うとこ
ろを知らず』19 イエスその問わんと思えるを知りて言い給う『なんじら「暫
くせば我を見ず、また暫くして我を見るべし」と我が言いしを尋ねあうか。

キリストは16節で、

「16 暫くせば汝ら我を見ず、また暫くして我を見るべし』」

と言われた。その言葉が非常に気になったものだから、弟子たちがいろいろ言い合っているから、またそれに対してキリストが答えられたというわけです。

「しばらくしたら私は見えない、またしばらくしたら私を見る」

と。キリストは十字架の死が迫っていることをちゃんと知っておられるから、こう言われた。

「もうすぐ、お前たちの誰かが裏切るぞ」

と。ユダのことです。

「そうしたらば、自分は捕らえられて、ゴルゴタへ行く」

と。これが

「しばらくしたら見えなくなる」

ということです。そして、十字架上の死を遂げるから。

「しばらくしたら私を見る」

というのは復活のことです。もう復活をちゃんとキリストは知っておられる。そのことは前にもたびたび預言しておられるのに、みんな上の空で聞いているし、聞いても何のことだか分からない。旧約ではほとんど復活なんてことは言わないからね。それに近い言葉はありますけれども、そんなことは彼らは受けとれない。受けとるわけはない。本当にそういう人はひとりもいないんだから。エノクだのエリヤなんてのは、いきなり天界に昇ってしまったというけれども、この復活とはちょっと意味がちがう。そして、キリストは十字架とか何とか仰らない。

20 誠にまことに汝らに告ぐ、なんじらは泣き悲しみ、世は喜ばん。

と言う。「泣き悲しむ」というのは、自分が十字架にかかって死ぬから、みんな泣き悲しん

で散ってしまうと。絶望してしまうわけです。そして、

「ああ、やっつけた。キリストはユダヤ教に背いたから、けしからんやつだ」

と言って、世の中のやつは、ローマの兵隊でも、パリサイ、祭司、教法師、即ちユダヤ教の連中は喜ぶ。群衆は伴いていたんだけれども、これもまた煽動されて、みんなキリストから離れてしまった。弟子たちも最後まで伴いていかない。そのこともキリストは預言している。

「お前たちは私を残して散る時がくる」

と。全く独りですよね。天涯孤独というのは文字通りキリストのことです。

なんじらは泣き悲しみ、世は喜ばん。

というのは非常に深刻な内容です。

●復活と聖霊降臨

汝ら憂うべし、然れどその憂は喜悦とならん。

けれども今度は、本当に喜ぶ時がくるぞと。22節に、

「その喜悦を奪う者なし」

と書いてあるでしょ。この喜びはもう誰からも奪われない。この世の喜びはまたいろいろ変わります。けれども、キリストが与える喜びはもうどんなことがあっても奪われない。まぁ大変な人です。

「それだけの内容をお前たちにやるぞ」

と言う。

21 おんな産まんとする時は憂あり、その期いたるに因りてなり。子を産みてのちは苦痛をおぼえず、世に人の生まれたる喜悦によりてなり。22 斯く汝らも今は憂あり、

「憂」と言っても、これは大した憂いではない。本当の憂いではないですから。

然れど我ふたたび汝らを見ん、その時なんじらの心喜ぶべし、その喜悦を奪う者なし。23 かの日には汝ら何事をも我に問うまじ。

「かの日」というのは非常に深刻な、謎のような言葉です。預言書にもよく、エレミヤでもイザヤでも「その日」という言い方をしているが、同じことです。

ここにちゃんと大事なことが三つ出ている。「悲しみの日」は、これは十字架だ。その後で「喜ぶ」というのは、これは復活です。「かの日」というのは聖霊降臨です。この

「十字架・復活・聖霊」

をちゃんとキリストは、「悲しみ」だの、「喜び」だのという言い方で言っておられる。

「かの日には汝ら何事をも我に問うまじ」

という、そこが聖霊の世界です。

「御霊が来ると、御霊の光で、私が地上で言ったりしたりしたことが全部分かってくる」

と言う。

「どうしようか？」

と言って、憂えたり心配する。どうにもならんです、この心配は。けれども、その心配が、憂いが歓喜に変わるという。これは福音書の終りの方を見ると、みんな悲しんでうろたえていますからね。一番弟子のペテロでもダメなんだ。時々えらく誉められるけれども、また躓いたりしている。キリストを三度否（いな）んだりした。

歴史上、キリストの十字架に比べうるものは一つもない。どんな殉教の死もキリストの死とは質がちがう。まぁそれだから、キリスト教界でとにかく十字架が一番重んぜられるのは、それはもちろんそれだけの意味があるわけです。過去・現在・未来の我という、我執という罪が全部これで贖われてしまった。

「お前はもう我執がない、そういった現実に私は入れてやったぞ」

というのに、なぜ、この我執の無いという「無」がわるいんですか。みんなこの「無」をなかなかわかってくれない。まぁ、あなた方はわかったけれどもね。この「無」が躓きの無なんだ、キリスト教界では。

この頃キリスト新聞に『無者キリスト』と『無の神学』を姉妹篇として、その広告を毎週載っけてくれる。私は一回でいいと言ったのに。あれはサービスしているんだね。1月から毎週載っかっている。けれども、誰も注文してこない（笑）。そんなもんですよ、広告なんてのは。

●無即無限無量

まぁ、しょうがない。私は、いくら人が分からなくたって、これは死ぬまで生涯を通して言わざるをえない。というのは、この「無」は我執が取れただけではないんだ。すぐ、「無限無量」に来てしまうんだから。即、無限無量にくる。『エン・クリスト』12号の「無即無限無量」という号は増刷したいと思ってます。おおいに伝道に使っていただきたい。勇ましく伝道してくださいよ。お金のことは考えないでいいですから。誰かがガサッと寄付してくれるでしょう。

無即無限無量ということ。これがその歓喜です。この歓喜を奪うものはない。

さっき司会者が、

「大いに先生に傾倒していた者がかえって逃げて行ってしまった」

と言った。それは私の責任もあるでしょう。けれども、本当にお気の毒です。まぁ、私が向う側に行ってから、それから気がついたら、それでもいいよ。とにかく、気がついてもらわなければ困る。

「やっぱり、先生は本ものだった」
ということがね。私は誰に言われなくたって、キリストに
「本ものだ」
と言われているからしょうがない。私の中にやって来ているものは本ものなんです。私自身はダメのカスですけれども、私の中に来ているものは本ものです。無即無限無量です。
だから、復活のキリストにでっくわして、
「ああ、やっぱり、イエスさまは、我々の先生は甦って現れた」
と。なにしろ、戸が閉じていたって、入って来るんだからね。おそろしい現実です。レントゲンよりか凄いんだから。
まぁ大変なもんです、キリストの霊的現実というものは。それは彼が完全に無だったからです。無者だったからです。だから、神が百％に現じたわけです。我々の信仰の現実はそこまではいかない。いかないけれども、しかし、質的にはいただいている。
「汝ら、父の全きがごとく全かれ」
と言われたでしょ。
「完全であれ」
と。誰がこれに及第しますか。世界中に何億人いようが、キリストのあの言葉に及第するやつは一人もいない。山上の大告白で一番凄い言葉がこれなんです。ひとつも水を割らないで、そういうことを言うんだからね、キリストというひとは。
「神さまの全きがごとく、お前たちも全かれ」
なんて。普通の先生が、普通の道徳の哲学の人が、それだけのことを誰が言えるか。キリストでなければ言えない。
キリストがなぜ、そういうことを言うかというと、
「その全さを、完全性をお前にやるぞ」
ということ。量的には全くいきませんよ。質的にはこの完全性がくる。これが聖霊なんです。
「お前の中に全きものをやるぞ。神の霊をやるぞ、私が十字架にかかってから」
と。この内容は仏教の大慈大悲よりかもっと凄いんです――仏教の大慈大悲も、それはある真理は真理だけれども、やはりこれは悟りの世界だからね――悟りではない。
だから、それやこれやを私はどうしても詩をもって表現しないではいられない。もう大体の私の詩の構造がグーッと来ている。凄いことになる。それはダンテも驚くね。どうして、私みたいな、詩人でも何でもないやつが、そういう詩を書かなければならないか。歌人でも何でもないやつが、どうして、日本で一番たくさん讃美歌を書いてしまったか。不思議でしょうがない。これは御霊の力と知恵ですからね、しょうがない。

●地獄行きを全部私が引き受けた

完全と言おうが、無限無量と言おうがいい。これが、

「お前たちは今に泣き悲しむぞ。けれども、単なるセンチメンタルな泣きではないぞ。徹底的に泣け。自分が十字架にかかって、かわいそうだなんて、そんな意味で泣くな。我々がどんなに救われがたいものであるか、そのどん底の悲しみを味わえ」

ということです。救われがたい。私たちは、神さまに審かれたら、これは地獄行きだからね。

「**罪の価は死なり**」

という。

「その地獄行きを全部私が引き受けた」

というのがこの十字架なんです。

「お前たちのその地獄行きは全部ここで引き受けた。贖ってしまったからもういい」

と。十字架の片一方の盗賊が――もう片一方は傲慢だから地獄へ落とされたよ――こっちのやつは、

「**さんざん悪いことをしました。せめても覚えてください**」

と言って砕けた。

「**お前は今日、私と一緒に天界に行く**」

と。これが人類を二つに分けるものだと言ったでしょ。心が砕けるか砕けないかで、人類を二つに分ける。何教でも何でもない。傲慢なやつは、これはサタンの手下だからね。だから、不思議なんですよ、この二人の盗賊が両側にいて、人類を二分するような姿が表れたことが。みんな同罪なんだ、我々は。みんな我々も十字架にかけられなければならない。ところが、

「**悪うございました。申し訳ありません**」

と言って砕けた方は天界に行く。

「**お前は神の子なら、俺たちを救ったらよかろう**」

なんて生意気なことを言ったやつは、落とされてしまう。この二人の会話が実によく表わしている。ルカ伝の22章です。

「お前たちはどん底の悲しみなんだ。その悲しみの姿。それはみんな私が引き受けた」

と。今度は、

「自分は問題ではない。自分が善いの悪いのと、そんな相対的な善悪なんか問題じゃない」

と。ということは、普通の世界で「道徳をいい加減にしろ」ということではないですよ。普通の世界では、エラスムスの言った自由意志もあります。それぞれ、みんなそのある真

理性は持っています。けれども、もうひとつ次元の違った世界へくると、そんなものはみんな同じことになってしまう。五十歩百歩です。それがマルチン・ルターが言った「奴隷意志論」です。

「キリストの奴隷になれ。自分の意志は捨てろ。それが本当の自由の世界だ」と。あの『クリスチャンの自由』というのはこちらの『歎異抄』と共に大事な本ですから。

そして、この贖いという大事業をキリストはやった。最大の事業はキリストの十字架という死なんだ。

●百行一死に如かず

今度の『エン・クリスト』21号（１９８５年２月冬季号）の独和対照の詩を読みます。

「百行一死に如かず」ソネット［独和対照］

１９８５年１月15日作　天韻

「百聞一見に如かず。
百言一行に如かず。
百行一死に如かず。

「百言一行に如かず」と。行ないは大事なんだ。百の言葉も一つの行ないにはかわない。いくらしゃべったってダメだ、実践しろと。それから、「百行一死に如かず」。キリストの地上における百行は素晴らしい桁違いの百行なんです。けれども、その十字架の死には及ばない。キリストの十字架は百行を全うしたものだからね。

此の死は他者に生命の光を与える。
美しく聳え立つスイスの山々を私は知っていた
テル物語りのシラーの劇詩によって、
ウィルヘルム・テルのことです。あの中に出てくるからね。
またその美景の絵画によって。
だが百聞は到底一見に及ばない。

スイスに行って実際の景色を見たら、これは本で読んだ以上だということです。

聖書は生死を賭けてのドラマである。
だから私はからだと体験でこれに読み入る。

全存在と自分の体験でこれに読み入る。

かくて私は識る、百言は一行に如かざるを。

聖書にはたくさん言葉があるが、しかし、大事なのはそこに行われているところの、預言者や使徒や、いわんやキリストの行である。

私は見た、兄の素晴らしい生きざまを。
彼の死はいよいよ以て私に能(はたら)きかけていた。

かくて彼の死はその百行に絶する。」

兄貴が死んだことは、私にとってはもう生涯の力ですから。皆さんからいただいたお花は、いつも私はここが終ると、ここで母と兄に飾ることにしたんです。

●その喜悦（よろこび）を奪う者なし

そういうことで、キリストは、

「**私はただ死んだのではないぞ。さんざん預言している通りではないか**」

と。初めて復活のキリストにでっくわして、彼らは喜んだ。始めは怪しんだよ、なかなか信じなかった。マグダラのマリヤから聞いて、

「そんなことがあるか？」

なんて言っているんだから。ところが、今度は本式に喜んだ。喜んだけれども、その喜びはまだ本当の喜びにはならない。

「そうか、キリストというのは大変なひとだな。うれしいな」

なんて。けれども、そのうれしさは本当に身につかない。だから、

「お前たち、祈って待っていろ。今度はその喜びを奪うものがないようなことにしてやるぞ」

というのが、この聖霊が来たときにです。聖霊が来たときに、この喜びが本ものになる。もうどんなことにでっくわしても、この喜びを奪うことがない。涙の中で微笑むことができる世界です。どんなに寂しいようでも、ちっとも寂しくない。

「天涯孤独でありながら、天の万軍と一緒だ」

という世界だ。まぁ、チャカチャカ、普通の文明文化では喜ばしいようなことをやっているよ。けれども、そんなものは消えていくよな。ところが、この喜びは消えないんです。歓喜から歓喜へという。

クリスチャンで、くすぶっている顔していたらダメだよ、くすぶったら。何をくすぶっているかと。どんな艱難にあっても、どんなに迫害されても、ニコニコしているようでなくては。女性のそういう微笑みほどうるわしいものはない。

「**その喜悦（よろこび）を奪う者なし**」

という。聖霊を与えられたら、聖霊の喜び――聖霊の愛という言葉もあるけれども――聖霊の喜びを奪うものなしと。はっきり言っているんだ、キリストは。誰も奪うことができない。どんな悲しみも。

私はこないだも、ある人に言った。

「とにかく、集会に来なさい。いろいろ悲しい現実にでっくわしているようだけれども」

「まだ、その気になりません」

「本気にならないから来なさい」
と言うんだ、私は。なってからは、来る必要はない。
とにかく、この道場に入ったならば、ここは天国ですからね。私はお説教なんかしているんじゃないんだ。そういう事態に来たら、どんなに事業に失敗しようが、試験に落第しようが、失恋しようが、いいよ。そんなものと桁がちがう世界に入る。このキリストが入ったら、そんなものとは桁がちがうんです。
「エン・クリスト」
というのは、私は伊達（だて）で言っているんじゃない。「エン・クリスト」という言葉があなた方に、もし観念となったらダメですよ、しょっちゅう現実でなければ。
「キリストの中に」
ということです。

●かの日には

23 **かの日には汝ら何事をも我に問うまじ。**

「かの日」というのは、聖霊が来たら、その日からはもう別に聞かなくても、聖書がスラスラ読めてしまう。読めてしまうどころではない、聖書の文字が化体（かたい）してくる。からだに化する。だから、聖書は読まないではいられない。ご飯は食べないではいられないように、水は飲まないではいられないように。聖書を読まないでいいような日があったら、魂がずるこけていくよ。お勤めで読んでいるんじゃないんだ。
「今日は、一章ずつ読むことにしました」
なんて、それはわるくはないけれども。私はおおよそ規則的なことができない男だものだからね。とにかく、ざるを得なくなる。いい習慣になる。
私は、今年は『詩歌集』（第8巻、１９８６刊）を出します。来年は『感想と紀行』（第9巻、１９８７刊）を出す。再来年は『一日千年』（後に第10巻『聖書は大ドラマである』に改題、１９８８刊）。一年、三六五日読めるような、ちょうどヒルティの『眠られぬ夜のために』みたいなものを、私は毎日書いているんですよ、どんなに忙しくても。夜中の一時になろうが二時になろうが。もう実行してますから。ちょうど一年間で第十巻ができてしまう。ヒルティよりかおもしろいよ。今のところ下書きだけれども。だから、必ずできます。この三巻は必ず出ます。お金がなくなったら、君たちに援助してもらおう。援助しなくてもいいよ。そうしたら、出さない話だ。そうしたら、あなた方の愛がいかに足りないかがわかる（笑）。一緒にこれは福音をやっているんだからね。
「小池先生の撰集がどうのこうの」
ではない。これは戦いなんです。もう少し気合がかかってこないとね、みんな。

23 **かの日には汝ら何事をも我に問うまじ。**

即ち、聖霊の日には汝ら何事をも我に問うまじと。

「御霊がちゃんと教えるぞ。私の言ったりしたことがみんな読めてくるぞ」

と。

誠にまことに汝らに告ぐ、汝等のすべて父に求むる物をば、我が名によりて賜うべし。

「よりて」でなくて、これは「ありて」です。これは「エン」です。「名によりて」と書いてあるけれども、これは

「名において、名に在って、名の中で」

ということです。キリストの名の中に自分を入れなければダメなんですよ。「名によって」なんて、手段ではないんだから。クリスチャンの祈りで終りに

「キリストの御名によって」

なんてやっている。あれは一番大事な言葉なんですよ、自分が祈ったよりか。

「本当にあなたの御名の中にいますから、ですから、私のこんないい加減な祈りもどうぞ全部とりなしてください」

という、それが「御名にあって」ということです。

「あなたの御名に在って」

ということ。

「わが名の中で祈りなさい。そうしたらば、必ず賜う」

という。

●あなたの中で

24 **なんじら今までは何をも我が名によりて求めたることなし。求めよ、然らば受けん、而して汝らの喜悦(よろこび)みたさるべし。**

自分がこっち側にいて祈ったってダメですよ。

「御名にあって」

ということは

「あなたの中で」

ということです。御名とキリスト自身とは同じことですから。「主さま！」と言うときには、呼んだと同時にその中に入ってしまう。同時に入るんです。だから、すぐバーッと異言が突発したりする。

こないだの京都集会の最後の集会のときの異言は特別な異言だったね。みんな震撼してしまった。祈りの世界でそれを体験してますか、本当にキリストの中に入って。福音書のキリストをありありと思い浮かべてくださいよ。そして、キリストにしがみつけばいい。みんな遠慮している。日本人は遠慮が多くて困るんだ。信仰の世界で遠慮したらダメです。

いいですか。「御名にあって」というのはそういう現実ですから。

誠にまことに汝らに告ぐ、汝等のすべて父に求むる物をば、我が名によりて賜うべし。23 なんじら今までは何をも我が名によりて求めたることなし。求めよ、然らば受けん、而して汝らの喜悦みたさるべし。

「わが名の中で求めよ」と。「名にあって」でも「名の中で」でもどっちでもいい。「よりて」ではない。手段方法ではない。

25 我これらの事を譬にて語りたりしが、また譬にて語らず、明白に父のことを汝らに告ぐるとき来らん。26 その日には

これもそうです。聖霊がやって来た日には、

汝等わが名によりて求めん。

わが名の中で求めると。

我は汝らの為に父に請うと言わず、

もう大丈夫なんだ。

27 父みずから汝らを愛し給えばなり。これ汝等われを愛し、また我の父より出で来りしことを信じたるに因る。

上からキリストはやって来ましたからね。今度は、聖霊の中でいきなり父に祈る。「父」でもいいし、私は「キリスト」だけれども。「父」でもどっちでもいいですよ、祈りのときは。非常に具体的だから私はキリストに祈るのだけれども、父に祈ったって、どっちだって同じことです。

その中に入れたのは、十字架という門を通ったから入れたんです。間違えてはこまる。いきなり入ったのではない。十字架という門を通って、キリストの御名の中に入った。ここに十字架という門がある。ダンテが地獄の門を書いたね。有名な言葉がある。私の詩には天国の門に素晴らしい言葉が出てくるから。まぁそんなことは言わないことにしよう。時々しゃべりたくなって困る。

●聖霊の力の凄さを自分で味わう

28 われ父より出でて世にきたれり、また世を離れて父に往くなり』29 弟子たち言う『視よ、今は明白に語りて聊かも譬をいい給わず。

さんざんキリストは譬えで言われたからね。

30 我ら今なんじの知り給わぬ所なく、また人の汝に問うを待ち給わぬことを知る。之によりて汝の神より出できたり給いしことを信ず』

はい、そのとおり。

31 イエス答え給う『なんじら今、信ずるか。

やっとわかったかと。

32視よ、なんじら散されて各自おのが処にゆき、我をひとり遺すとき到らん、

ここにも書いてある。マタイ伝にも出ている。

「私はとっ捕まると、お前たちは逃げて行く」

と。始めペテロは、キリストを捕まえたローマの兵隊の耳を切ったね。そしたら、キリストが

「剣を納めろ。剣を取るものは剣で滅びるぞ」

と。そして、その耳を治してやった。本当に付けてしまった。インドにそういうことをやったやつがいるんです、キリストのちょっと似たようなことをしたやつが。霊的な力は凄いものを持っているね。こないだは、しかし、私を通して不治の病が治ってしまったものな。全く不思議なことだ。まぁ、聖霊の生命、聖霊の力がどんなに凄いものかをだんだん自分で味わってくださいよ。

さっき内村先生の全集のあるところを読んだけれども、聖霊のことを語ってらっしゃっても、まだその現実からものを言ってないね、内村先生も。やっぱり、それが無教会の限度だね。それはちょっと入ってらっしゃるけれども。先生自身の文章には力があるから、皆さんはいろんな意味で参考にはなさって結構です。私も喜んで読みますけれども。

パウロ、ヨハネ、ペテロを本当に読んでごらんなさい。新約聖書は本当に凄い。驚嘆するから。そしてまた、それを読んでいて本当にうれしいんだ。この歓喜を奪うものなしと。使徒行伝がどんなに楽しい、うれしい、力強い本であるかということは、聖霊が来なければわからない。私の藤井先生が、

「使徒行伝にはあまり興味がない」

と仰った。ということはやはり、信仰が観念の方にズレているからです。私なんかは無教会のときには、

「ああ、そうですか」

なんて思って、あまり読まなかった。ところが、御霊が来たら、福音書のもの凄さ、使徒行伝のもの凄さがわかった。とにかく、新約聖書は全部そうです。大変なもんです。それが読めてないんだよな、普通の教会は。なにも悪口を言うのではないですよ。ただ残念です、本当に。そんな生易しい世界ではないんですよ。

●四位一体

「私を一人遺す時が来る。もうその時が間近かだ」

と。17章から今度はキリストのもの凄い祈りの世界に入る。

否すでに到れり。然れど我ひとり居るにあらず、父われと偕に在すなり。

偕にでもあるし、父の中にでもある。共在、内在、両方持っていなければダメですよ。一緒に歩いている。いや、中に入って、あるいは担がれて歩いている。キリストに担がれて

歩く。「キリストフォロス」というのは、子供のキリストを担いでいる有名なお話ですけれども。旧約聖書は「共に」が多い。「エホバと共に」と。新約になると、「キリストの中に」が多い。旧新約を合わせて共在内在。本当の友情というものはそうでしょ。

「お前が俺か、俺がお前か」

という、わけの分からないような世界でしょ、二人でいながら。本当の恋愛もそうでしょ。そういう、二にして一、一にして二。1＝2＝3。三位一体。これは一如の世界、共在の世界です。三位一体、三相一貫。私は「四位一体」なんて言う。1＝2＝3＝4だ。

「神＝キリスト＝聖霊＝我」

というものが一つ。みんなこれが一つになってしまう。こんな数学は霊的な数学だから。サタンの世界もそうだよ。サタンと黄泉と罪と死、この四つが悪の世界、暗黒の世界の四位一体だ。キリストは、サタンと地獄と罪と死、それをみんなやっつけた。

「我すでに世に勝てり」

というのが最後に出てくる。

「けれども、我ひとりだが、お前たちがみんな私を捨てたって、どっこいというわけだよ」

と。これは「父なる神と私は一つだから」と。

33 **此等のことを汝らに語りたるは、汝ら我に在りて**

ここは「我に在りて」とはっきり言っている。

平安を得んが為なり。

この訳はいい。平和でなくて平安です。この最後の33節は非常に大事な節です。

「我に在りて平安を汝らは持つため」

と書いてある。

なんじら世にありては患難あり、

艱難はどうせあるよと。この世は悩みの谷、涙の谷だからね。

然れど雄々しかれ。我すでに世に勝てり』

「私は既に世に勝った。サタンに勝った。死に勝った。罪に勝った」

と。要するに、キリストはこの「サタンと黄泉と罪と死」、この全体に勝った。このサタンに勝ったから、この全部に勝った。

これは『無者キリスト』にも書いたでしょ。サタンとの荒野の一騎討ちだ。キリストはサタンとの一騎討ちで、彼は霊力で勝ったかというと、霊力で勝たない。キリストは神さまの御力で勝った。自分の霊力なんて思っていやしない。キリストは神の御力を内側にいただいて勝っている。キリスト自身は我々と同じように弱きひとです。ただ徹底的に無になってしまったから無即無限無量がやってきたから、キリストは無限無量でもって勝った。

「我既にサタンに勝てり。世に勝てり」

と。十字架の死にも、もちろん罪に勝った。彼は義人だから。神さまの言うことを全部、百％に聞いたから、これを「義人」という。それができないのが「罪びと」です。我々はみな

「罪の価は死なり」

という。死ぬ。キリストはそれに勝った。我々は相対的にはいずれみんな死にますよね。けれども、

「どっこい、お前たちは死んでも死なないぞ」

と、その世界にこのキリストは入れてくださっている。ヨハネ伝に一番よくそのことが書いてある。まぁ大変なひとがユダヤから現れものだ。それでありながら、ユダヤ人はあいかわらずこのキリストを受けとらない。旧約聖書で止まっている。旧約聖書のチャンピオンだったパウロがひっくり返されて、キリストの最大の弟子になったのに、

「あのパウロのやつはまちがえた」

なんて言う。冗談じゃない。全くユダヤ人というのは頑なだね。ちょっと不可解なんだ。

プラスの四位一体とマイナスの四位一体がある。神―キリスト―聖霊―我。この中に、四位一体の世界に入ったら、これが本当の平安です。この平安は力があるんです。この平安は力を持っている。こっち（サタン―地獄―死―罪）は滅びへ行く。黙示録ではこのサタンがやっつけられる預言まで書いてある。

去年、黙示録をやっておいてよかったね。私は詩へのいい準備ができた。もちろん、黙示録ばっかり歌うのではない。中身はもの凄いですから。とても盛りきれないくらいたくさんある。もう私ははちきれそうだ。

●弱さに徹しろ

いろんな悩みがあっていいぞと。ペテロ書簡を見ましょう。ピッタリした言葉が書いてある。ペテロ前書4章12節、

「12 **愛する者よ、汝らを試みんとて来（きた）れる火のごとき試練を異なる事として怪しまず、13 反（かえ）ってキリストの苦難に与（あずか）れば、与るほど喜べ、**

と書いてある。それは聖霊が来ているから、ペテロはこういうことが言えるんです。

なんじら彼の栄光の顕れん時にも喜び楽しまん為なり。14 もし汝等キリストの名のために謗（そし）られなば幸福（さいわい）なり。栄光の御霊、

栄光の聖霊が、

すなわち神の御霊なんじらの上に留まり給えばなり。」（ペテロ前書4・12～14）

と。全くそうです。いろんなことにでっくわせばでっくわすほど逆に力がくる。はっきり、反比例しますよ。逆に力が来なければ、聖霊の世界ではないですよ、ヘコたれたりしたら。「何をか！」というものがくる。いわゆる人間的なガンバリではない。よくみんな何かするとすぐ、「ガンバレ」と言うね。がんばったって、すぐくたびれてしまう。いろんなことに遭

えばあうほど、力が上からやってくる。中から盛り上がってくる。行き詰まりを知らない人になる。こんなうれしいことはないですよ。だから、

「この歓喜を奪うものなし」

という。力が来ているから。力が来てなければ、この歓喜はないですよ。キリストの勝利を現実に、

「われ既に世に勝てり。お前たちと一緒にいくらでも勝っていくぞ」

と言うんです。「既に勝ったから、いよいよ勝っていくぞ」ということです。

「キリストは既に勝ったけれども、こっちはなかなか勝てません」

じゃないですよ。キリストが勝ったから、こいつはみんなやっつけたから、だから、いよいよ――相対的現実にはいろんなことがあるけれども――心配いらんと。

「聖霊の力でもっていよいよお前たちは勝っていく」

と。私は今日、号に「天勝」と書いた。その天的な天勝を常にいただきながら進んで行く。何でも私の号は、「天」を付ければ、限りなくできてしまう。代表的なのは、「天鐘」「天韻」だけれども。天の鐘は天の音を発するから。鐘でも韻でもいい。

「雄々しかれ。われ既に世に勝てり」

という。雄々しかれと言ったって、男ばかりではない。女の方も、中身は女丈婦であれと。

「女性は弱きものなり」

なんてシェイクスピアが言ったが、そうじゃない。女性はむしろ男よりか忍耐強いね。男は強そうでヘタすると弱い。女は弱そうで逆に強い。合わせるとちょうどいい。人間というものは、男でも女性的な内容、女でも男性的な内容を持っているときに、本当にそれは人らしい人になる。パーセンテージはもちろん違うさ。でなければ、人はわからないよな、お互いに。

「されど、雄々しかれ」

なんて言われると、

「さぁ、今度は元気を出さなければいかん」

なんて思う。もう福音の世界は全部、キリストが裏付けしているんですから、心配いりませんよ。

「私は雄々しくしてやるぞ。私の力を受けろ。雄々しからざるをえないぞ」

と。命令は単なる命令ではない。全部、裏付けがしてある。そこがはっきりつかめなかったら、福音はいつまでたってもダメですよ。何が福音だかわからなくなってしまう。逆に言うと、

「弱さに徹しろ。そうすると、本当の強さが出てくるぞ」

と。福音の世界は、量的にはいろいろですけれども、質的にはみんな絶対の世界なんです。質的絶対の世界。質的絶対界、これが福音の世界です。

●使命感に生きろ

私は「幾歳まで生きようか」なんて、そんなことは思ってない。自分の使命がある限りは神さまはどこまでも置いといてくださる。そのかわり、使命を果さなかったら、どこでも神さまは私をやっつけてしまう。そういう話。そういう意味で年齢はもう超越している。今の青年はそういった使命感が非常に足りないですね。

「どこへ行けばどれくらいの俸給で、暮しがどうでこうで」

と、この世的な計算ばっかりやっている。ダメだよ、そんなことでは。日本は滅びるよ、そんなことでは。

「ボーイズ　ビー　アンビシャス　イン　クライスト」

「キリストにあって本当の抱負を抱け、使命感に生きろ」

と。学校の先生がそういう教育をしないでどうするかというんだ。とんでもないですよ、日本の教育は。

「一番大事なのは、先生自身が自らを教育せよ。まず最初がそれだ」

と。ヒルティが言っている「ゼルプスト・ビルドゥング」（自己形成）ということ。それは、

「キリストにぶつかって、聖書にぶつかって、自分の魂の教育から始めないで、教育ができるか」

と言うんだよな。内村先生だったら憤慨するだろうね。もう少し、いい意味における武士道的精神がなければダメだよ。

とにかく、世界中がおかしくなっている。このままでは、いろんな意味においておかしくなる。精神的にも物質的にもみんなおかしくなる。だから、第三次戦争はヘタするとやってくる。一番恐ろしいことは、人間の心がゆがんでいること。原子爆弾でも何でもない。

だから、キリストや使徒たちは本当にその点で戦いました。「雄々しかれ」というのは、英雄中の英雄はキリストです。一番優しい人が一番強い。一番憐れみ深い人が一番もの凄い。それが「羔（こひつじ）の怒り」という言葉なんです。

「われ既に勝てり。また、勝ちつつある。お前たちと一緒に勝っていく」

と。ローマ書8章を見てください。35節、

「35 **我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難（なやみ）か、苦難（くるしみ）か、迫害か、飢か、裸か、危険（あやうぎ）か、剣（つるぎ）か。36 録（しる）して『汝のために我らは、終日（ひねもす）、殺されて屠（ほふ）らるべき羊の如きものと為（せ）られたり』とあるが如し。**

これは初代教会の人たちがキリストのためにこういうことを言っている。

37 然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼（よ）り、勝ち得て余りあり。

「勝ち得て余りあり」と言う。パウロはもう勝利、勝利でもって、コリント後書11章のあのたくさんの艱難を突発して行った。それは全部、御霊の力です。

38 **われ確く信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん**
者も、力ある者も、39 高きも深きも、
此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、
我らを離れしむるを得ざることを。」（ロマ8・35～39）

こういう言い方をするからね。これはみんな相対的なものですよ。

「神の愛」と言おうが、キリストの愛と言おうが、聖霊の愛と言おうが同じことです。もう絶叫しているんだ、パウロは。ローマ書8章というのは凄い。聖書の中で一番大事な章の一つです。

●「人生の歌」

私は、『羔』という――まだ印刷していない――こういうのを私は一年間、毎月一冊ずつ書いていった。これは1932年(昭和7年)11月、今から53年前に私が訳したロングフェローの詩を読みます。

「人生の歌」　ロングフェロー（アメリカ）

言う勿れ悲しき調べに、
　『人生は槿花一朝の夢！』と。
魂魄まどろめば死し、
　見ゆるところは真相に非ざれば。

人生は真実、人生は厳粛。
　塋穴いかで終結ならんや。
『塵より出でて塵に還る』
　そは霊魂の謂にはあらず。

楽しみも悲しみも
　わが命数にも道路にもあらず、
路は実践にあり、明日の我は
　今日の我を乗り越えてゆく。

芸術は劫く時代は流る。
　われらが心臓縦し堅くして勇むとも、
音もなき鼓の如くつねに奏づ
　奥津城に到る埋葬の曲を。

此世の戦の広き場にて
　人の生命の露営の野にて
黙しつつ駆らるる牛馬たらざれ、
　戦闘の丈夫たれよ！

楽しかる後の日をたのむ勿れ！
　逝きにし死をして死を葬らしめよ。
働け！　働け活ける今！
　衷に心情あり、上には神あり

偉人の生涯を想ひては
　われらが生を崇高になし、
別るるときに臨みて我らは
　後に足跡をとどめん時の砂漠に。

足跡、そはおそらく兄弟の、
　人の世の厳かなる海原を漕ぎゆき人の。
そを見て寄るべなき難破の者は
　再び勇みて振ひ起つらん。

いざ我ら起ちて為しつづけん、
　万難に耐ふる心根もて
愈々達しては愈々追求め、
　働くを学び、待つを学ばん。

なかなかいい詩でしょ。
「戦闘の丈夫たれよ！」
という。キリストのさっきの「雄々しかれ」という言葉があったから、ちょっとこれを引用したんです。
　そういうことで、我々にとっては正に勝利と歓喜の福音を、キリスト自身が現実に賜りつつ、進んで行きます。ちょうど、この花が歓喜のように歌っているような気がします。
皆さん、ありがとうございます。